アジア共同体構想と統一思想

——特に教育の次元において——

忠北大学教授
キム テ チャン
金泰昌

1．いくつかの下準備としての問題提起

実をいうと、私は「アジア共同体」という言葉が好きでありながらも、その言葉に含まれている意味が漠然とするばかりでなく、あまり快くない含みをそこから振い落すことができない。欧州共同体というものが厳然と存在しており、それが保たれているいくつかの目立っている長短所などが指摘されているところに、アジア共同体、あるいは太平洋共同体というものがあってはいけないはずはないだろうが、それにしてもいまだに調子よく呼応を得られない局面があることを否認できないというのは、そこにそれだけの十分な理由と原因があると見なければならない。

私はことさらに、ここでかつての不幸で不愉快だった歴史的事件などを繰り返し考えてみたくはない。たとえ、そうしたとしても、既に起こった不幸とか不愉快が消え失せるわけでもなく歴史の加害者たちが大悟覚醒して心機一転するという保障もないはずであり、考え方によっては時間と努力の浪費になるだけかも知れないという気がするからである。それゆえ、どうしてもアジア共同体あるいは太平洋共同体というものを取り上げるようになり、そ

こで教育が引き受けるべき役割とか機能に関して私の意見を述べるようにという要請にこたえるためにいくつかの下準備としての問題を提起してみたいと思う。

まず第1に、アジア共同体を取り上げるようになった動機にからまる問題である。よくいわれているように、それがたとえトインビーなどの歴史学者が予想したように文明の展開方向が西欧からアジアの方に移って行かれるという世界史的成り行きの診断を受け入れてのことだとか、または米国の外交政策の方向が大西洋の方よりは太平洋の方に傾くようになったという、ある政策作成者およびその補佐官たちの発言に対する対応姿勢として動かしはじめたことだとか、そのいずれにしても、いわゆる強大国中心の関心形成や認知変化によっての動機誘発であるとしたらそれはさほど望ましくないだけでなく、非常に危ういことになり得るということも指摘しなければならない。

第2に、本当にアジア共同体というものが取り上げられるほどアジア地域には共同体の形成要因があるかどうかという問題である。例えばギリシア・ローマ地域とかヨーロッパ地域にあったような文化的、宗教的の共同基盤と意識構造とか価値観においての最少限の合意基盤があるかどうかという問題を考えてみなければならない。

第3に、アジア共同体を構想しようとするとき、いろいろの局面で問題の提起があり得るはずであろうが、特に教育の分野にだけ限って考えてみても、非常に深刻で困難な問題が数多くあり得る。その中でも、私は3つの極めて根本的な問題を取り上げて考えてみたいと思う。

①教育哲学的な次元に属する問題としてどのような人間像をアジア共同体の教育指標にするかという理念定立に関する問題。

②教育課程または内容の次元に属する問題としてアジア共同体の核心教科目をどのようなもので合意を得るかという問題。

③そしてアジア共同体の教育指標を誠実に追求、実現させるための熱意と能力と抱負を合わせ持つ教師の充員と養成の問題。

上に挙げた諸問題が、アジア共同体という構想に対する第一次的な好感の込められた反応にもかかわらず、何かさっぱりとしない深層心理を漂わせて

いるのである。しかし、問題と障害がいかに大きく激しいといっても、基本的にアジア共同体という構想が時代的養成であり状況的な当為があるということには異論がなく、だれよりも前進的考え方でこの問題を考えてみたいというのが今の私の心境であることを明らかにしながら実際的な問題領域に入ってみることにする。

2．共同体形成の前提条件

アジア共同体を形成する問題を取り上げるとき、何よりも先に考えられる前提条件がいくつかあると思う。

まず第1に、アジア共同体はどこまでも強大国中心の共同体にはならないように、その発想と論理と方向づけが事前に十分検討されるプロセスを経てゆかねばならない。万が一、米国とか日本などのようないわゆる今日の国際関係においての強大国が自国の利害計算を一方的に適用させる発想と論理、その方向づけから構想される共同体となるなら、それは彼らのアジア勢力圏になるだけであり、アジアの共同体にはなり得ないのである。そしてまたそれに似つかわしい名称とか形式とは関係なく実質的には新しい形態の植民地作りにすぎないものになり、従って時代錯誤的な退行になるだけであるから、そのようになる可能性を徹底的に取り除ける仕事が先に行われなければならない。

第2には、非政府的、純粋民間的な性格と水準の機構を先に活性化させて肯定的で積極的経験と事例の積み重ねを通して、円満な利害調整やバランスがとれる意思決定の底力と経験が積み重なることによって、政府次元の政治的性格の機構へと育成、転換して行く漸進的な仕方をとるべきであろう。それは文化的、宗教的に多様・多元性を前提とする共存、共栄の論理と生理を体得する経験の蓄積がなくては、合理的な葛藤解消の能力や意思が形成されることが難しくなり、そうなると共同体形成の最低限の合意基盤も構えられなくなるからである。

第3に、植民地時代の精神的、生活体験的な名残をできるだけ早く払いの

けて、肯定的で積極的、前向き的な未来歴史創造的心性を養うことに全力投球の努力と投資を傾けることによって新しいアジア的精神構造を形成し、そのような精神的基礎の上にアジア共同体の形成、発展、拡充が成し遂げられるようにしなければならない。また、それは脱アジア指向的な自己軽視の片偏りとか盲目的な自己陶酔の蛮勇から免れて、正しい歴史意識に基づく自己衿持と創造意欲を目指すものでなければならない。西欧とか米国を羨望の的とするアジアにとどまっている限り、アジア共同体を形成することはできない。それはついには、西欧とか米国によって主導されるアジア勢力圏になるだけだ。

第4に、アジア共同体の形成のためにそこに参加する民族や国家が一様に衿持を持ち得る寄与と役割が合理的に配分され、多様でありそれぞれ異なる寄与と役割の価値が公平に認められる雰囲気と手続きの条件などに合意が形成されなければならない。政治的なパワーとか経済的な富が、勢力計算の基準になる機構ではなく、それぞれの個性ある寄与と役割が交響楽的な調和のとれる共同体の構築を目指さなければならない。

3．アジア共同体の教育においての課題

アジア共同体が名実ともに共同体として形成、発展、拡充されるためには、まず共同体指向的な指導者が育てられなければならないし、共同体内の構成民族あるいは構成国家の教育の中にアジア共同体に似合っている教育が実効性のあるように包括的に行われるべきである。ところが今日の現実の条件を見ると、果たして民族中心の教育や国家万能の教育をいかに、そしてどれほどまで共同体指向的な教育と接合、併行させることができるかという問題にぶつからざるを得ない。最も望ましいことは、漸次的に民族、国家指向の教育を共同体を目指す教育に転換、発展させて行くことであるだろうが、強固な民族主義、国家主義の政治・社会・文化的な信念体系をどのように克服、止揚していくかという点は、それほど手軽に解決される性質のものではない。

このような問題なども民族ごとに、あるいは国家によって一様ではないだ

ろう。その条件と状況がそれぞれ異なり、そのために一律的に当為的な命題を作成、提示することもできない。しかし、最も基本的な段階的接近方法を考えてみることはできるのではないだろうか。

最も基本的な第1段階は、アジア共同体形成の予想参加民族、あるいは国家から関心と熱意を持つ民族国家を集めて「望ましいアジア人像」に関する国際会議を開くことである。宗教別、文化別の理想的な人間像の条件と資質、品性の項目作成によって最低の基本条件を作ってみる仕事を実施する。

その次の段階は、高度の知識と経験を合わせ持つ専門家たちによって構成される「望ましいアジア人像」研究委員会を作り、先の段階で作られた最低の基本条件を深みあるように研究、検討して、意味ある研究のプロジェクトをいくつか立案、提示するようにして、資格ある個人、あるいは団体に用役を与えて集中研究するようにし、その結果を程よい時期に報告してもらうことにする。その報告は専門家とそのことに関心と熱意を見せる非専門家が一緒に参加する国際会議で事細かに検討、討論した後、アジア共同体によって合意、制定される望ましいアジア人像としてアジア共同体教育の基本指標を提示し、それに基づいた具体的な教育活動が立案、実施されるようにすることである。

第3の段階は、アジア共同体の構成民族または国家の教育現場にて、それぞれの自己中心的な教育内容と共同体指向的な教育内容との互いのぶつかり合い関係に対する具体的な折衷の方法や、折衷に対する国際間の事例交換のための多角的、多元的接触通路の設立を急がねばならない。アジア共同体の教育文化研究事務局などのような機構のものを設立することによって実務的な機能を整えるようにするともっと能率的になるであろう。

第4の段階は、アジア共同体の構成民族あるいは国家間の民間次元においての教師交換計画の大幅な拡充、実施であるが、例えばそれぞれ異なる文化と伝統の教育現場で教えてみたり、学んでみながら得た経験と観察が相互の理解だけでなく、共同体の形成にはなくてはならない共通感覚の啓発にも大きく役立つだろうと信じてやまないからである。従来の交換計画と違う点は、従来は交換といっても、専攻科目によって地域とか学校を取り換えてみることであったのに反して、共同体指向の教科目を地域とか学校を異にして教えてみたり、学んでみたりする違いが挙げられる。

第5の段階は、4つの段階と相ともに行うか、あるいはその手順が取り換えられることもあるだろうが、何しろ多少の現場からの試行錯誤を通して得られた成果と基本指標の互いの検討によって、アジア共同体の教育のための基本的な核心教科目を作成することができるであろう。ここに含められる諸教科目はアジア共同体の構成民族とか国家間の共同目標を考え合わせて共存、共栄の知恵と哲学を強調し、相互尊重と自己尊重が程よく啓発されるよう努力するところにその意味があるという内容のものでなければならない。

第6の段階は、アジア共同体教師協議会とアジア共同体学父母協議会などのような国際民間教育相互連絡網を組織、運営することによって、精神的、物理的なつながりの強化を構えていくことが必要である。それで例えば冬とか夏の休み期間を利用して相互訪問を民泊の体制で実施、管理すると、より経済効率的にお互いの文化と生活の理解の幅と深みを増進することができるだろうと思う。

第7の段階は、ほかの段階での諸仕事と相ともに行うことも、それぞれ別に推し進めることもできるもので、アジア共同体の大学と大学院の設立、運営のことである。将来の有能なアジア共同体の指導者を養成、輩出するために、各界各層の指導者に必要な高等教育が受けられるようにする高等教育機関が必要であるだけでなく、アジア共同体の精神的、知的な求心体の役割を果たせる知的共同体が必要であると考えるが、それをアジア共同体大学あるいは大学院としたらどうかという気がする。それはアジア共同体の構成民族あるいは国家的能力があり熱意を持つ実業人の代表として構成されるアジア共同体大学設立推進委員会のようなものを作って、出資方式とか組織、運営に関する基本原則に対して合意を成した後に実務陣を組織して具体的な仕事に取りかかるようにすることも一つの良い方法であろう。できるだけ一つの場所にアジア共同体構成民族とか、国家の宗教・文化・人宗的多元性が集約的に表出されている代表的な特性を考え合わせて、例えばシンガポールなどのような所に建てておくといろいろと機能的になるだろうと思う。

4．一つのわずかな実験

私はさる5年の間、引き続き一つのわずかな教育実験をやってみたが、そのわずかな成果を通して、広い意味での国際理解教育の事例という点からこれからのアジア共同体の教育において、特に核心教科目の問題に対するある一つの方向提示の材料を提示してみようと思う。

まず第1に、わが国の大学教育の一般的な傾向は、特に最近になって民族主義的な性格が強調され、西欧化、近代化の早く能率的な実現という目的意識があちこちに染み込んでおり、専攻為主の実用性にもっと大きな重みがおかれているといえるであろう。

そして、建前として打ち出す名分はともかく教育指標に内在されている努力と指向が西欧と米国への偏向があることは否定することはできない。西欧とか米国で教育を受けて帰ってくる学者や教授たちが、主導的な役割をする大学教育の現場での研究や教授の基本的な枠組みは、ほとんどすべて西欧と米国から借りてきたことにしかならないし、それを通して得られるようになる視角とか眼識が、西欧あるいは米国指向的なものとならざるを得ないであろう。それでアジアに対する認識とか眼識がほとんど、あるいは全く持ち合わせていないだけでなく、アジア認識の必要性さえ最近までは別に気付いていなかった。そのような事情は韓国にだけある特殊状況ではなく、おそらくアジアの諸民族とか国家の場合にもほとんど普遍的に認められる現状ではないかと思われる。

いわば私たちは以前から自己認識の環境要件としての他者を、西欧や米国で、それも一方的な模倣や追従という形態で目標と理想を設定してきたものであり、そこにはアジアという観念や概念が全く存在していなかったということになる。

アジアが私たちの近い生活の根拠地であり、自己認識の環境要件として絶大的な価値と意味を持っているという事実に目を開くようにしてくれたものは、非常にアイロニカルにもほかならず、私たちが彼らのようになろうとじ

たばたしながらいくらかは成功したが、基本的には失敗せざるを得なかった西欧や米国であったことは、ただ今私たちがアジア共同体の構想という問題を前にして深く反省してみる必要のある現実条件なのである。

訳はどうあろうとも、このようなわが国とアジア地域の教育状況の中で新しい認識と視覚、発想の必要性を切に感じたあげくに、大学の教養課程に「人類文化と地域社会」という講座を新しく準備して、その講座を通して比較宗教・思想論、比較文化・文明論、そして人間、平和、未来という3つの基本課程を設定、教授してきたわけである。この講座は毎年、毎学期に任意に選択することができるようにした教養選択科目である。その3つの基本課程を学期ごとに取り換えていきながら、近代西欧の思想、学問、技術、文化、生活などの相対化と、アジア地域で発生、発展した思想、学問、技術、文化、生活などの再発見、再認識を比較の眼目に昇華させて、健全なるアジア的哲学と教養を定立させることをその目的としたのである。

優越した文化とか思想の前で気付く劣等感や自己卑下ではなく、堂々たる主体的認識を持って対等に比較できる自信と底力を育てて、そこで相互尊重の基盤を築き上げる相互理解が生まれるとき、初めて望ましい共存の知恵が身に付けられると信じていたので、そのような方向への精神構造の改善、育成を目標にする教養科目を設置するべき必要性を感じていたのであり、それを引き続き運営、実施しようとする意志をもっと強めるようになり、今まで5年の間に一貫して続けてきたのである。

毎学期ごとに最初の時間に受講の動機と要望事項を記録して出してもらうことにする。そして終わりの時間にその講座を通して得られたことが何であったかを記録して提出するようにするが、そのことでアジア認識とアジアとの関連の中から、自己民族と国家の確認においての非常に大きな変化を見るようになって、私は衝撃を受けると同時に強い刺激となって希望を未来に見ることのできる実証的なよりどころが得られるようになった。一般的に見て、大学生は一番変化をもたらすことが難しい学生階層である。もし幼稚園とか小学校の時代からアジアの認識をもっと効率的に教育していくならば、アジア人の矜持とアジア認識をバランスをとり続けて会得していくものであ

るから、アジア共同体形成のための精神的な基盤はもっとたやすく整えられるであろうと思われる。

5．今何が必要であるか

アジア共同体が形成されるためには、また、アジア共同体形成のための教育課題が成功的に成し遂げられるためには、遠い将来はともかくも、今、必ずやるべきことがいくつかある。

まず第1に、現代的な意味においての社会・文化・宗教的多元性に関する肯定的で建設的な認識である。それも例えば、西欧とか米国の文化人類学者たちが言うようなある中心文化あるいは主導文化をその前提として、その周辺に位置づける異質文化の存在と価値を相対的に認めるような形の多元性ではなく、そのいずれもが同等な位置と価値をともに認められる形においての多元性をいうのである。そのような意味においての多元性は西欧や米国においてよりは、アジアにおいてもっと密度の濃い現実性を発見できるから、それぞれ異なる社会、文化、宗教、思想、価値ののどかな共存のための知恵と技術を人類が体得するための素晴らしい機会を得ることのできるところが、ほかならぬアジアであるという意味で、積極的な意義を見つけ出すことができるだろうと思う。

第2に、不幸で不愉快であった過去の歴史を主導した古い見方と発想、そして視覚を形成してきた歴史認識を是正して、新しい見方と発想と視覚を持ち合わせるのになくてはならない必須的な前提条件としての新しい歴史認識が、少なくともアジアの知的風土の中に定着することが何よりも急務なことである。さらにまた、そのことは借用認識や代理理解のようなものではなく、アジア人の主体的認識や理解に基づくべきである。どうしたら過ぎ去った過去の不幸で不愉快だった受難と圧制の歴史の中から、今日のアジア人に事新しい歴史発展の原動力になるようなものを見つけ出して整えられるであろうか。

第3に、アジア的葛藤解消の方法を見つけ出すことが何よりも必要に迫られ

ている。今までの西欧式の葛藤解消の仕方は、主に合法的あるいは適法的な節次に従った合意形成によるものであって、それが意のごとくならないときには、力による一方的な方法を講じた支配・服従の解決方法にほかならなかった。しかし、そのことはユダヤ・キリスト教的伝統とか、最少限度の合意基盤を整えた法体系の存在を前提にするものである。ところがアジアの場合には、いわばそのような前提もなく互いに競合する異質的な価値体系と法体系の共存を認め合う条件の中で、何をその基準にして葛藤解消の仕方を模索するだろうかを探り尋ねざるを得ない。是と非を正しくわきまえる正義というものは、それを判断するときのよりどころとする基準に対する合意をその前置きの条件とするときにだけ可能なものであり、そしてその基準の存在は互いに共通する文化に対する最少限の共通感覚が形成されなければならないが、今日のアジアには今までもそのことが形成されていなかったという点から、これからこそアジア的葛藤解消の方法を模索することが切実に要望されるところである。

そして第4に、過ぎ去った過去よりは、来るべき未来から共通運命の精神的基盤を見つけ出そうとする未来指向的な意識の改革が成し遂げられなければならない。過ぎ去った過去の加害者と被害者であるという立場からの非難や批判というものは、取り戻すことのできない過去への執着のために今日の関係を暗く彩るばかりでなく、未来への展望をも曇らす恐れがあるのである。それゆえ、今や加害者の自己合理化ではない、被害者側の寛大な思いやりと抱容力で一応、大目に見ることにし、より明るい未来への創造のために欣快に協力するようお互いが一つになって努力しなければならない。そのような意味において、アジア共同体の形成のための費用負担においては、過去の加害者であった民族や国家などはもっと多い取り分を受け持つことによって、被害者であった民族や国家などに対するまことの懺悔の意を表す機会を見つけ出すことができるのではないかと思われる。そうすることによって勢力拡張とか主導権の勝ち取りのための経費負担や寄与金投資ではない、純粋な協力と貢献が好意的に認められることができる。また、そうなるとき初めて共同体形成のための基本的な雰囲気というものが作られるようになるだろう。

6．統一思想の役割

それではアジア共同体の形成において、特にその教育的側面においての統一思想の役割はどうあるべきだろうか。

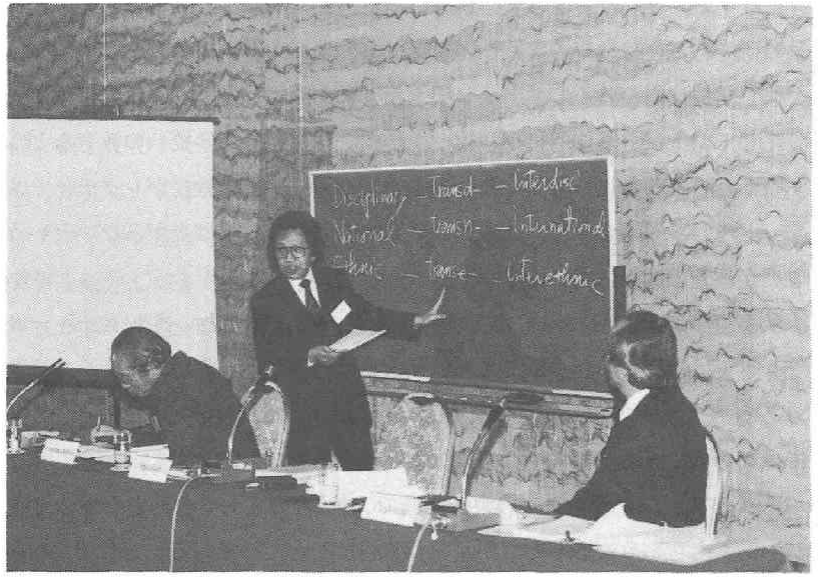
まず第1に、統一思想は、アジアのさまざまな文化、宗教、思想、哲学などをそれぞれ自分の位置で固有の伝統と価値を持ち続けたまま、程よく和合して共存するようにしてあげられる基盤を築き上げる役割を引き受けられるし、またそのようにしなくてはならない。だれもが対等な立場において、競合、共存する文化、宗教、思想、哲学などが、不必要で無意味な闘争の関係に立つことなく、和やかで生産的な共存の関係にあるためには、そうすることのできる「共存の場」が必要なのであるが、そのことを恐らく統一思想が提供するように努力すると具合がよくなるだろう。

第2に、統一思想はその思想の実現をアジア共同体大学、大学院の設立、運営を通してアジアの知的共同体の核心を形成しなければならないし、そのことの基本理念を提示する方法によって、実質的にアジア共同体の新しい文化、宗教、思想、哲学の共存様式を打ちたてる基礎作業に真っ先に立って進むべきである。また共同体の理想と目標達成に対する熱意と能力を持ち合わせた指導者の精神的な支株は、統一思想の発展的研究と普及を通して成し遂げられるように、より具体的な方案を講じて行かなければならない。

第3に、統一思想はそれを一方的に普及、伝播させるもう一つの文化的帝国主義方式を止揚して、いろいろ相異なる文化、宗教、思想、哲学の意味と価値、そして相互関係を正しく照明してやる思考と探求の枠組みを作り上げることに主力を注いで事新しいアジア的思惟形態の原型を見つけ出し、それがついには全地球的、全人類的な普遍性をもって昇華、発展できるきっかけと活力を供給するエネルギーの源泉になるように努力しなければならない。

そして最後に、統一思想はアジア人によって定立された汎世界的な宗教・思想体系として新しい文化世界の創造のための基盤となるべきであるから、人種と国境を超越した共同研究などを通してもっとその意味が推し広げて満

たされなければならないし、その精神がより深められてアジア共同体の大切な共同の文化財産となるように、あらゆる人々の理解と評価が得られるための根気よい自己革新を続けなければならない。



朴武成教授（議長）、金泰昌教授（スピーカー）、金子孫市教授（コメンテーター）右より